

四電

いかたげんぱつ

第4回 伊方原発再稼働を許さないデモ

主催：伊方原発の再稼働を許さない市民ネットワーク・広島 2012.8.31 17:00～

知ってください！
大飯で止めないと
次に危ないのは私たちです！



南風に乗れ、潮に乗れ 広島は伊方原発 最大の被害地元 です。

プルトニウム半減期 2.4 万年。
海が汚れる…土が汚れる…。
原発事故は「想定内」です。

危険な四国電力伊方原発

四国電力・伊方（いかた）原発は危険な原発です。特に3号機（出力 89 万 kW）はプルサーマル炉でウラン・プルトニウム混合酸化物を燃料としています。さらに伊方原発はその敷地内に持っているところのなくなった使用済み核燃料を1408本（2012年3月末現在）も蓄積しており、また2001年から2010年までの正常運転中、合計552兆ベクレルの放射性物質トリチウムを液体の形で瀬戸内海に垂れ流しました。これは日本の原発の中でも突出して多い量です。トリチウムを大量放出している事実から、他の放射性物質も大量に放出していると推測されます。

(裏面参照のこと)



原子力保安院がストレステストを承認している原発は、関電大飯原発3・4号機、それに四電伊方原発3号機です。

次の再稼働は、伊方原発です。

再稼働・事故がなくても 危険な伊方原発 大量の放射性廃棄物を蓄積

四国電力 伊方発電所が蓄積する 放射性廃棄物

単位：使用済み核燃料は核燃料集合体数
低レベル放射性廃棄物は 20 ㏩ドラム缶数

	使用済み核燃料			低レベル 廃棄物
	発生量	搬出量	蓄積量	蓄積量
2011 年度	84	0	1,408	30,000
2010 年度	66	0	1,324	30,000
2009 年度	110	70	1,258	29,500
2008 年度	58	70	1,218	29,500
2007 年度	80	42	1,230	28,500

**プルトニウム (半減期 2.4 万年)
飛散の危険。通用しない「想定外」**

核燃料集合体

燃料棒を格納する容器のことで、2011 年度 (2011 年 3 月末) には伊方原発の敷地内に合計 **1408 体**の集合体が蓄積されている。**合計約 9 万本の使用済み核燃料棒**が蓄積されていることになる。特に伊方原発 3 号機はプルサーマル炉であるため、ここで発生する燃料棒はプルトニウム酸化物を含んでおり特に危険。搬出先である青森県六ヶ所所の再処理工場に受け入れる余裕がなくなっている。

低レベル放射性廃棄物

数字はすべて 20 ㏩ドラム缶の概数。本来は、青森県六ヶ所所の低レベル放射性物質埋設センターに搬出して厳重に埋設されるべきであるが、**満杯のため、2010 年度以降搬出できていない。**

原発は通常運転でも 放射能を出しますが 伊方は特に悪質

原発は通常運転でも様々な**放射性物質を大気や水中に放出しています**が、加圧水型の伊方原発は中でも悪質です。下表は過去 10 年間の間に放出した液体の形での放射性トリチウムの量ですが悪質な**関西電力・美浜、高浜、大飯の3原発をはるかに上回る量**を放出しているのが伊方原発です。原子力施設運転管理年報によれば、**10 年間で 550 テラベクレル**です。すべて瀬戸内海に流されました。放射性トリチウムは体の中に入ると、細胞の高分子組織を破壊する可能性のある放射性物質です。電気事業連合会は安全だと宣伝しています。

四国電力 伊方原子力発電所が 10 年間で放出した液体の形での トリチウム (関西電力3 原発との比較)

(原子力施設運転管理年報 平成 23 年度版による)
単位：テラ (兆) ベクレル

年度	伊方	美浜	高浜	大飯	総合計
2010	51.0	17	53	13	83
2009	57.0	18	63	64	145
2008	58.0	23	59	90	172
2007	66.0	16	63	98	177
2006	46.0	15	69	66	150
2005	53.0	14	68	77	159
2004	68.0	20	60	89	169
2003	54.0	18	40	74	132
2002	52.0	23	43	81	147
2001	47.0	1.3	6.5	56	134
合計	552.0	177	583	708	1468

**— 関電の3つの原発より —
はるかに上回るトリチウム放出**

原発が稼働しないと困るのは誰か？

今年の4月20日四国電力社長・千葉昭氏は記者会見で『**伊方が動かないと需給はきびしい。火力が1基止まれば、非常に綱渡りの数字だ**』と述べ、伊方原発再稼働を訴えました。(電力業界の広報宣伝紙こと朝日新聞大阪本社版 4月21日付け朝刊) こういうウソを平気でつける神経はちょっと理解しがたいですが、もともと電力生産設備過剰の四国電力は、今年の夏、原発なしでも悠々と乗り切れました。それは**原発なしで約 500 万 kW の生産設備を持っている**上に、管内に**土佐発電所や発電設備 120 万 kW を誇る電源開発の橘湾発電所 (徳島県阿南市) をもっている**からです。今年8月21日ピーク時 571 万 kW の供給をしましたが、そのうち 142 万 kW までがこうした管内発電事業者からの他社購入でした。ちなみに他電力会社からの融通電力はゼロでした。四国電力は生産過剰になりこそすれ、『**電力が足りない**』などということは絶対ないのです。

では、なぜ千葉氏はウソまでついて**伊方を再稼働させたいのか？**それは**再稼働しなければ、財務体質が悪化する**からです。市場規模の小さい四電はもともとリスクの大きい原発など持つべき

ではなかったのです。そればかりではありません。もしこのまま再稼働できないということは、廃炉を意味します。

2012年3月31日現在、四電の純資産は 2830 億円しかありません。 それに対して**原子力発電設備は 1065 億円**の資産計上、また保有核燃料及び使用済み核燃料の資産計上は 1384 億円、この**原発関連の2項目だけで 2449 億円**の計上です。(平成 24 年四国電力有価証券報告書) 伊方が廃炉と決まった途端にこれらの資産はゴミクズと化します。普通の上場企業であれば、廃炉費用・核燃料安全化費用を考えれば**四電はたちまち債務超過、倒産**です。伊方再稼働は四電にとって死活問題、**ウソをつこうが地震や津波があろうが、人が死のうが、危険な伊方を再稼働したい、これが偽らざる四電のホンネ**です。

四国電力の原子力発電を除く ピーク時最大供給能力 (推定)

(単位は万 kW)

	自社発電	494.7
電源開発橘湾発電所	120.0	
土佐発電所	16.7	
電源開発水力設備	18.7	
その他	-	
合計	650.1 以上	

資料出典：日本語 wikipedia「日本の火力発電所」及び「電源開発」ホームページより

四国電力 8月21日ピーク時供給力の内訳

(単位は万 kW)

	一般水力	揚水	火力	原子力	新エネルギー	他社受電	(内融通)	合計	原子力除く
認可発電設備	52.7	61.5	380.5	202.2	0.0	-	-	696.9	494.7
当日実績	36.0	52.0	341.0	0.0	0.0	142.0	0.0	571.0	
設備利用率	68.3%	84.6%	89.6%	0.0%	-	-	-		

資料出典：「平成 24 年度四国電力有価証券報告書」及び「四国電力でんき予報」より